

# 述語句末音素の形態音韻論的位置づけ

—子音動詞を中心に—

R O N I

## 要旨

日本語の動詞、特に子音動詞では活用形、例えば *yomu, yomi, yoma, yome* の最後の音素 *-u, -i, -a, -e* の形態的位置づけに関していろいろな考え方がある。本稿ではそれらの音素は動詞をはじめとした述語がテンス・アスペクト・モダリティなどの多様な文法語要素を接続するための連結要素として扱うことを提案する。子音動詞の最後の音素 *u* は実際の文では非過去の意味を持っているが、他の要素を連結する場合の *u* は非過去の意味を持っておらず、ただの連結要素である。前者は具体的レベルの *u*、後者は抽象的レベルの *u* と位置付けられる。連結要素 *-u* は運用上、周辺によってそのままの音素 *-u* であったり、*-i, -a, -e, -∅* の音素に変わったりする。この場合連結要素 *u, i, a, e, ∅* は異形態素として扱うことができる。

## 1. はじめに

日本語の動詞、特に子音動詞では活用形、例えば *yomu, yomi, yoma, yome* の最後の音素 *-u, -i, -a, -e* の形態的位置づけに関していろいろな考え方がある。本稿では言語類型論的観点から、それらの音素は動詞をはじめとした述語がテンス・アスペクト・モダリティなどの多様な文法要素を接続し述語句を構成するための連結要素として扱う立場を支持する。日本語では、「私の本」「大学の前」「明日の朝」などの「の」や、「きれいな女性」「無駄な時間」などの「な」も連結要素として扱うことができる。この場合、連結要素は前の要素と後の要素との間の接着剤として接続するという役割を持っていると考えられ、「私」「本」「大学」「前」「明日」「朝」「きれい」「無駄」等の自立形態は名詞と名詞を連結する時に「の」、状態性述語と名詞を連結する時には「な」という形態となると整理でき、形式を語彙的に処理することができる。

日本語の動詞述語部では、動詞語根に接続する *-masu, -te, -ta, -nai, -eru/-rareru, -ba* 等は拘束語であるが、一つの形式からなる。これに対して、いくつかの形式が組み合わさって文法化・一体化し一つの形式になったものもある。*-kotogadekiru, -tokoroda, -masenka, -mashooka, -temoii, -teiru, -tekudasai, -tewaikenai, -nakerebanaranai, -nakutemoii, -kamoshirenai, -hazuda* 等がそれである。

これらの形式は意味的・機能的に言わばテンス・アスペクト・モダリティ等という文法的意味を付与するものであり、常に動詞の後に接続される。本稿では、語順を重視する言語類型論に基づいて、要素の前後関係（以下、前の要素を前要素、後ろの要素を後要素とする）とを区別するが、テンスやアスペクト等の形式は後要素で、前要素は述語の主要要素である。

後要素は広い意味の接尾語であり、述語句の中で主要になる要素（動詞）を修飾するという役割ととらえる。主要要素になるのは動詞の語根である。例えば「読む」の活用は *yomu, yoma, yomi, yome* である。この形態変化（活用）から、語根は *yom* といえる。では、最後の音素 *-u, -a, -i, -e* の役割は何か。本稿では、従来学校文法などで、「活用」の一部と捉えられてきたこれらの音素を連結要素として扱えるという提案を記述する。

## 2. 「連結要素」とみる立場

筆者が知っている限り、日本語の動詞述語の語尾(接尾語)を「連結要素」として見る立場はあまり多くない。その中で城田俊(1998)は、例えば子音動詞 *yomu*, *yoma*, *yomi* の *-u*, *-a*, *-i* を「結合要素」と説明した(p.20)。さらに、母音動詞 *taberu* の *r* と *tabeyoo* の *y* も結合要素として扱うと説明した(p21)。

一般言語学的には、動詞は、規則動詞と不規則動詞の二つに分けられる。さらに規則動詞は母音動詞と子音動詞に区別される。日本語教育においてもこの区分が採用される。不規則動詞を除いて、日本語の動詞は動詞語根と接尾語からなる。例えば、母音動詞 *taberu*, *miru*, *okiru* などは、語根 *tabe*, *mi*, *oki* と接尾語 *ru* からなる。そして、子音動詞 *kau*, *motsu*, *uru*, *yobu*, *shinu*, *yomu*, *kaku*, *oyogu*, *hanasu* の最後の *-u* は、*-ru* と同じように接尾語としての機能・役割を果たす。語根としては順に *ka(w)*, *mot(s)*, *ur*, *yob*, *shin*, *yom*, *kak*, *oyog*, *hanas* である。子音動詞は「動詞語根+*u*」で *u* 動詞(動詞 I)と、母音動詞は「動詞語根+*ru*」で *ru* 動詞(動詞 II)と言う。これに対して、城田俊の考え方では子音動詞と母音動詞を区別せず、*u* 動詞だけがあるという整理となる。

本稿では、先に言えば結合要素(連結要素)という立場は支持するが、言語一般に存する母音動詞・子音動詞の区別は維持し、母音動詞 *taberu* の語根は *taber* でなく *tabe* であり、接尾語 *ru* は子音動詞の接尾語 *u* と同じ役割を果たすとかんがえる。*taberu* の *r* も結合要素とまでは認めない。日本語の動詞述語句では、動詞は前要素として主要要素になるから、もし異形態を認めるなら、後要素を変えた方がいいだろうと思う。もちろん、この後要素をどのように考えたらいかがが議論になっており、本稿はその試論の一つと考えていい。

## 3. 動詞述語句での後要素

連結要素について議論する前に、本節は動詞述語句における後要素のことを検討する。例えば、*yomimasu*, *yomitai*, *yomanai*, *yomanakerebanaranai* の後要素はそれぞれ *-imasu*, *-itai*, *-anai*, *-anakerebanaranai* でなく、*-masu*, *-tai*, *-nai*, *-nakerebanaranai* の方である<sup>1</sup>。母音動詞の場合 *tabemasu*, *tabetai*, *tabenai*, *tabenakerebanaranai* となって、共通に抽出できるのは *-masu*, *-tai*, *-nai*, *-nakerebanaranai* の部分だからである。更に、*yome*(命令)と *yomoo*(勧誘)の後ろの要素は *-e* と *-oo* である。それに対して、*yomeba* と *yomeru* の後ろの要素はそれぞれ *-eba* か *-ba*、*-eru* か *-ru* のどちらか迷わせる。*yomeba* の方は *-masu*, *-tai*, *-nai*, *-nakerebanaranai* と同様に、形態的に最初の音素が子音をとらえやすいため、*-ba* の方がいい。一方、*yomeru* の方は *-ru* の意味が母音動詞 *taberu* の *-ru* (子音動詞の場合 *yomu* の *-u*) と同じように非過去、非使役、能動などあるので、一語の母音動詞とすれば、*-ru* と考えられるし、可能な意味を表す後要素を抽出するならば *-eru* の方がいいと考えられる。後要素をどのように抽出するかによって、述語末音素の扱いが違ってくる。例えば、*-eba* と *-eru* を後要素としたら、連結要素がない、つまり、 $\emptyset$  であるのに対して、*-ba* と *-ru* を後要素としたら、それぞれの *-e* は連結要素として扱える。本稿では、*-e* (命令), *-oo* (意志), *-eru* (可能), *-ba* (仮定)を捉える。

このような述語句後要素は Roni (2008)における日本語動詞述語句の修飾要素として8節の表(8)のように把握する。後要素は海外で最も一般的に使用する日本語教科書『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 II』『新日本語の中級』から取り出したものである。以下、こ

れに従い子音動詞の活用形語尾を見ていく。

#### 4. 抽象的レベルと具体的レベルに関する u/ru

動詞に対する分類を2節で説明した。u 動詞と ru 動詞では、u/ru が接尾語として同じ役割・機能を持っている。さらに言えば、動詞だけでなく、形容詞 ureshii, utsukushii, umai の最後の-i、形容動詞と名詞の kanemochida, benrida, senseida, daigakuda などの最後の-da、そして、願望を表わす tehosshii や tai の最後の-i、否定を表わす nai の-i、丁寧を表わす masu と desu の最後の-u、受身を表す reru/rareru の-ru、使役を表す seru/saseru の-ru 等も、その要素は-u と-ru と同じ機能・役割を果たす。文末では、その機能・役割はテンスの非過去の意味である。この場合、-u/ru、-i、-da はそれぞれ-ta、-katta、-datta に対立する。

本節では、動詞の最後の音素・音節 u/ru を構文的な観点から観察する。u/ru は終止要素と連結要素の二つの機能を持っている。終止要素としての-u は非過去の意味を持っているが、後要素を持つ場合、連結要素としての-u は非過去の意味を持っておらず、後要素に連結する接着剤として機能している。

- (1) 私はこれからすぐ帰る。
- (2) はやく帰りたい。

用例(1)では述語部が「帰る/kaeru」であるが、kaeru の-u は具体的に非過去の意味を表している。その kaeru は語根 kaer と非過去を表す-u からなっている、つまり、「kaer+u」と考えられる。用例(2)では述語部が「帰りたい/kaeritai」であるが、語根 kaer と願望を表す-tai からなっている。語構成から見ると、「辞書形 kaeru+願望 tai」と考えられる。この kaeru も「kaer+u」からなっている。前者の(1)kaeru の u と後者の(2)kaeru の u はどう違うかということ、前者は具体的レベルの-u で、つまり、終結要素として扱うことができるのに対して、後者は抽象的レベルの-u で、ただの連結要素である。抽象的レベルの-u は何の意味も標示しない連結要素として機能している。この場合、抽象的・連結要素の-u は語根 kaer と願望を表す-tai を接着する機能を持っている。これに対して、具体的レベルの-u は非過去の意味を持っている形式である。「帰りたい kaer<sup>□</sup>itai」では抽象的レベル・連結要素-u は実際の文で-i, -a, -t などになる。この形態の変化についての具体的考察は次章で行うが、まず表(3)のように連結要素としての-u は真ん中であって、後要素としての-u は願望を表す ta(i)や使役を表わす se(ru)等に並行していると整理できる。

#### (3) 抽象的レベルと具体的レベルの u

動詞語根	抽象的レベル 連結要素	具体的レベル 終止要素
kaer (帰る)	-u- → -i- → -a- → -t-*	-u -tai -seru -te iru

## 5. 形態的な観点

## 5. 1. 子音動詞述語句での u の位置

4 節では、構文的な観点から、u が終止要素と連結要素の二つの機能を持っていると説明した。終止要素として、-u は文を終結させる機能を持っている。この役割の-u は非過去や非使役などの意味を持っている。これに対して、連結要素の役割も持っている。本稿では、連結要素としての-uが形態的にどのように位置付けられるかを説明する。

-u は-u に相当する要素と交換することができる。子音動詞 yomu の場合は命令-e を接続すると yome に、勧誘-oo を接続すると yomoo になるが、この場合、-u は非過去形として、-e(命令) や-oo(勧誘)等のような他の後要素と交換できると考えられる。一方、母音動詞 taberu が-tai に連結されたら tabetai で、-nai に連結されたら tabenai である。この場合、taberu の非過去-ru の役割は-tai と-nai の-i に実現されていると考えられる。文末-nai, -tai の-i は ru と同じく非過去を表す形式と言える。願望を表す-tai と否定を表す-nai と同様に、-nakerebanaranai, -tekudasai などの後要素や、utsukushii など形容詞語末の-i なども時制の意味を持っている-i と考えられる<sup>2</sup>。

## (4) 本稿で扱う u の位置

本稿で扱う考え方		
nom	u	
nom	∅	u (非過去)
nom	u	kotogadekiru
nom	i	masu
nom	i	tai
non	(i)	de
non	(i)	da
} 5.2 節で説明する。		
nom	a	nai
nom	a	nakerebanaranai
nom	e	ba
nom	∅	e (命令)
nom	∅	oo (勧誘)
↓		
連結要素として扱う		

この表で見ると、-tai と-nai の形式は、非過去という時制の意味を持っていてもその意味のある-i はいつも-ta(i)と-na(i)とともに存在しているため、一形式だと考えられる。この場合、例えば nomu の u は nomitai と nomanai の構造において、-tai や-nai に交換されるというより、連結要素のような形式になり、前要素 nom と後要素-tai/-nai との間の連結接着剤というものになっていると捉えられる。この場合、-u は意味を持たなくなり、ただの連結要素といえる。-u は前要素の動詞語根とそれを修飾する後要素との連結要素として、動詞述語部では、表(4)で見られるように、nom∅e や nom∅oo のように-uが出ず、∅ となったり、

nom<sup>u</sup>kotogadekiru のように-uのままで出現したり、nom<sup>i</sup>masu や nom<sup>i</sup>tai のように-iに変わったたり、yom<sup>a</sup>nai のように-aに変わったたり、yom<sup>e</sup>ba のように-eに変わったりする。本稿での連結要素はこのような考え方で扱う。

このように、終止の要素として別の広い意味の接尾語に交換できると対立関係にあるが、-u-は連結要素として別の音素-i-, -a-, -e-, -∅-となると整理できる。

## 5. 2. -u-の異形態と動詞 te 形/ta 形

4 節で説明したように、u は連結要素として接着剤のようなもので前要素の動詞語根と後要素のアスペクトやテンス等の形式を接着するという機能を持っている。そして、連結要素-u-は-u-のままで変化しなかったり、-i-, -a-, -e-, -∅-に変化したりする。この場合、形態音韻論では u/i/a/e/∅ に関しては異形態とも言える。

表(4)で触れたように、後要素-te/-ta が接続して日本語教育でいう-te/-ta 形を構成する場合、形態音韻論的現象が観察され、二つに分けられる<sup>3</sup>。-ta と-te の子音 t が影響を与える。一方、子音動詞では、語根の最後の子音のみが影響を受ける。本節は前要素の動詞語根と後要素が合わさって、連結要素-u-にどのような異形態が生じるかを観察する。表(5)を見ながら説明していく。

まず、-ta と-te は基本的には子音 t が重要であるため、本節では-te に代表させる。子音動詞は最後の音節が表(5)の①のように(w)u, t(s)u, ru, bu, nu, mu, ku, gu, su という音節からなる。動詞例は②のようである。

(5) -te/-ta 形に連結する-i-

動詞の最後の音節	動詞例	語根	最後の子音	語幹	変化	脱落	te 形動詞
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
(w)u	harawu 払う	haraw	w	harawi	harawite	haraw∅te	haratte
t(s)u	matu 待つ	mat	t	mati	matite	mat∅te	matte
ru	uru 売る	ur	r	uri	urite	ur∅te	utte
bu	asobu 遊ぶ	asob	b	asobi	asobite	asob∅te	asonde
nu	shinu 死ぬ	shin	n	shini	shinite	shin∅te	shinde
mu	yomu 読む	yom	m	yomi	yomite	yom∅te	yonde
ku	kaku 書く	kak	k	kaki	kakite	ka∅ite	kaite
gu	oyogu 泳ぐ	oyog	g	oyogi	oyogite	oyo∅ite	oyoide
su	hanasu 話す	hanas	s	hanasi	hanasite	-	hanasite

動詞は②、語根は③のようであるが、全ての動詞語根は子音④(=①)で終わると考えられる。語根に連結要素-i-を接続すると、⑤のような語幹の構造になる。-te を加えたら⑥になる。最後の音節が su である動詞(hanasu)のみ hanasite になって語構成がこの段階で終わる。この hanasite (「最後の音節が su である動詞」の te 形)の構造に基づいて、他の動詞を分析していく。つまり、他の動詞も最後の音節が su である動詞と同じように、「動詞語根+連結要素 i +te」と扱うことができるが、その動詞語根と-teの接続によって、形態音韻論の現象が生じ

ている。

最後の音節が u、tsu、ru である動詞は連結要素-i-が脱落する(⑦)。語根の最後の子音が t である動詞はそのまま変わらない。一方、子音が w と r である動詞は w と r が次の-te の子音 t に同化する(⑦)<sup>4</sup>。最後の音節が bu、nu、mu である動詞において、nu の場合は連結要素-i-が脱落して(⑦)、次の子音 t (歯茎・無声音)は濁音化して d (歯茎・有声音)に変化する。最後の音節が bu と mu の場合は連結要素-i-が脱落して(⑦)、語根の最後の子音 b と m (両唇音)は口腔の少し後ろの n (歯茎鼻音)に変化して、同時に次の子音 t (歯茎・無声音)は濁音化して d (歯茎・有声音)に変化する(⑧)<sup>5</sup>。最後の音節が ku と gu である動詞は連結要素-i-がそのまま、語根の最後の子音 k (軟口茎・無声音)と g (軟口茎・有声音)は脱落するが、最後の音節が ku である動詞は k も t も無声音であるため、-te の子音 t は変化しないのに対して、最後の音節が gu である動詞は g が有声音であるため、-te の子音 t (歯茎・無声音)は歯茎・有声音である d に変化・濁音化する<sup>6</sup>。

## 6. -u/-ru の意味

本節では、動詞-u/-ru はどのような意味・機能を持っているかを意味的に検討する。一般的には、-u/-ru の対立するものは、テンスにおいて過去-ta とヴォイスにおいて受身-reru/-rareru と使役-seru/-saseru とされるが、受身-reru/-rareru と使役-seru/-saseru には、それぞれ-ru がある。さらに、過去にすると、受身-reru/-rareru と使役-seru/-saseru は、それぞれ受身-reta/-raretā と使役-seta/-saseta になる。受身-reru/-rareru と使役-seru/-saseru にある-ru は非過去の意味を表す要素である。つまり、受身と使役の意味を表す要素は、順に-re-/-rare-と-se-/-sase-のみである<sup>7</sup>。

受身と使役は、ヴォイスの枠で議論されているが、ヴォイス体系を持っている言語では、普通その一つのヴォイスが一次的なヴォイスとなる。受身ヴォイスを持っている言語は普通、非受身(能動)が一次的なヴォイスになっている。使役ヴォイスを持っている言語は普通、非使役が一次的なヴォイスになっている。一方、二次的になっている受身と使役は、ある条件のもとに使用される<sup>8</sup>。これに基づいて、-re-/-rare-は受身の意味を持っている形態素で、-se-/-sase-は使役の意味を持っている形態素である。両方とも二次的なヴォイスである。一方、一次的になっている非受身(能動)と非使役の要素は、∅ 形態素によって表されているというふうに考える。

この前提で、形態素-u/-ru と同じ性格を持っている要素に対して同じ考え方をとる。例えば、可能-eru/-rareru と尊敬-reru/-rareru にも、可能と尊敬の意味を表す要素は順に-e-/-rare-と-re-/-rare-のみであるが、これに対立する無標の-ru は、命題事態の末尾にかならず時制の対立があるように、時制が最も本質的な意味であると考えられる。この節に述べた理由で、形態素-u/-ru を時制・非過去の意味を表す形態素と考える。ただし-rareru, -saseru も後要素をとる場合には、-ru が連結要素として働く。辞書形(みたい)としては rareru, saseru である。

## 7. 連結段階性における-u-の存在

本節では、-u/-ru-に関して言語類型論的にはどのように位置付けられるかを連結段階性<sup>9</sup>の観点から検討する。一般に、言語においては名詞句だけにおける「名詞+非名詞」、あるいは「非名詞+名詞」の構造では、その二つの要素の関係が緩く、形式的に連結要素があると認め

られる場合もあるし、逆に関係が強固で、連結要素があると認められない、連鎖の形となる場合もある。連結段階性は次のようである。

(6)	↑	7 名詞+助詞
関係が強固	↑	6 名詞+指示詞
	↑	5 名詞+疑問詞
	↑	4 名詞+数詞
	↑	3 名詞+形容詞
関係が緩い	↓	2 名詞+分詞形容詞 <sup>10</sup>
	↓	1 名詞+関係節

表(6)では、下に行けば行くほど関係が緩く、連結要素が必要である。その反対に、上に行けば行くほど関係は強固であり、連結要素が必要でない。全ての言語が全部の構造・段階を持っていると限らない。例えば、ある言語において、7番の段階(名詞+助詞)で連結要素を使う必要があれば、その下の段階(6番~1番)においても全て、連結要素を使わなければならない、つまり、必須である。6番の段階(名詞+指示詞)で連結要素を使う必要があれば、その下の段階(5番~1番)においても全て、連結要素が必要である。7番(名詞+助詞)だけは連結要素が要らないということになる。これを援用して、日本語の連結段階性を見ると以下のようなになる。

(7)	7	わたし が
	6	この かさ
	5	どの ひと <sup>11</sup>
	4	二人 *(の) 学生
	3a	きれい *(な) お嬢さん
	3b	美し *(い) お嬢さん
	2	太(太ってい) *(る) 人
	1	買 *(う) 人

用例(7)の句構造では、4番(名詞+数詞)の段階から連結要素が必要であると分かる。「二人の学生」の no の存在は必須である。つまり、その下の段階(3番~1番)には、連結要素が必須である。日本語の学校文法では、adjective は形容詞と形容動詞の2つに分けるが、3a番(名詞+形容詞)の句構造に連結要素 na があるのに対して、3b番と2番と1番の構造には、無いように見える。これは述語の活用形として処理を見ているためである。段階性の考え方では、4番以下、連結要素があると見るべきである。このケースには、「美しい/utsukushii」の -i-、「太る/futoru」の -u-、「買う/kau」の -u- は4番の no と3a番の na と同様に連結要素として扱う必要があると考えられるであろう。

本稿でも、この考え方を使用する。つまり、futoru と kau の最後 -u- という形態素を連結要素として使用できると考える。ただし、終止形態素の概念と違って、この考え方は、動詞述語部の構造における前要素である動詞語根とテンス・アスペクト等の形式である後要素の連結の

みに扱う。簡単に言えば、u は終止要素としては非過去などの意味を持っているが、連結要素としては意味を持っていない。ただの連結要素である。4 節で説明したように、前者は具体的レベルの u で、後者は抽象的レベルの u という。

## 8. 連結要素と後要素

5 節で説明したように、子音動詞の最後の母音-uは連結要素としてそのままの音素-uであったり、別の音素-i-, -a-, -∅-, -e-になったりする。つまり、連結要素-uは u>u、u>i、u>a、u>∅、u>e という形式で変わる。この場合、u、i、a、∅、e は異形態素と言ってよい。本節はどんな後要素がどの連結要素で接続するかを日本語教育と学校文法との比較をして観察する。後要素は海外で最も一般的に使用する日本語教科書『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 II』『新日本語の中級』から取り出したものである。連結要素と後要素は次の表のようである。-i-で接続する後要素が多いため、本節では a、b、c の三つに分ける。①～⑤は連結要素の分類で連結方法と言おう。

### (8) 連結要素と後要素

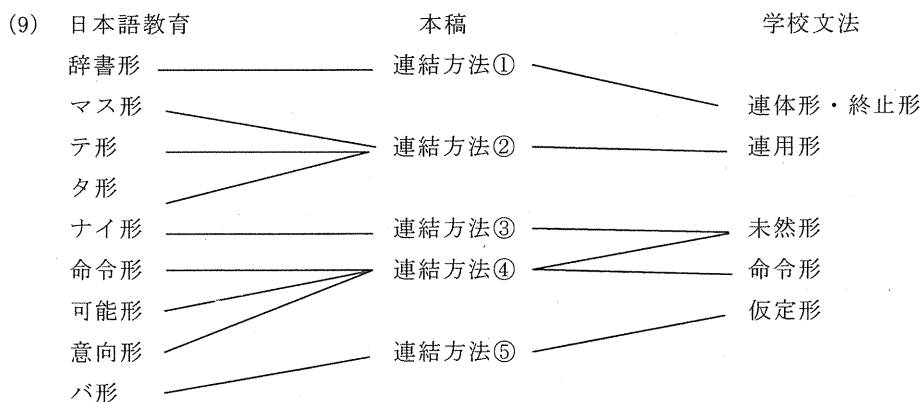
u	i			a	∅	e
	マス形 ②a	テ形 ②b	タ形 ②c			
①	②a	②b	②c	③	④	⑤
u (過去) kotogadekir u kotoda maeni to (仮定) noni (道具) tameni tokoroda na (禁止) kotogaaru yooninaru	masu masen masenka masoo masooka tai tagaru nagara yasui nikui o-ninaru o-kudasai o-suru sooda sugiru ppanasini nasai	te tekudasai teiru tebakariiru temoii tewaikenai tekara teyaru teageru temorau teitadaku tekureru tekudasaru temoraenaidesook a teitadakenaidesook a teitadakemasenka tekudasaimasenka tesimau tearu teoku temiru tekuru teiku teirutokoroda temo tehoshii	ta takotogaa ru tarisuru taatode tabakarid a tatokorod a tara taratoomo u	nai naidekudasai naide naitoikenai nakerebanaranai nakutemoii nakunaru zuni reru seru seteitadakemasen ka seteitadakitai setekudasai	oo (意志) eru (可能) e (命令)	ba baii

学校文法では、連結方法①の-uは連体形・終止形の一部に相当する。連結方法②aと連結方法②bと連結方法②cは連用形に相当する。学校文法でいう未然形は本稿の連結方法③に相当



する。連結方法⑤は仮定形に相当する。連結方法④の意志-ooの部分と可能の-eruの部分も学校文法での未然形に相当する<sup>12</sup>。連結方法④の命令の-eの部分は学校文法での命令形に相当する。

一方、日本語教育において一般的な文法の枠組みから見ると、連結方法①は辞書形に相当する。連結方法②a, b, cはそれぞれ順にマス形、テ形、タ形に相当する。ナイ形とバ形はそれぞれ本稿の連結要素③と⑤である。連結方法④は-eの命令形と-eruの可能形と-ooの意向形に相当する<sup>13</sup>。以上、このように学校文法と日本語教育文法に相当する本研究での連結方法は下の(9)のようにまとめられる。一般言語学の観点から見ると、このような連結方法は少なくとも、日本語教育文法と学校文法に入るためにより分りやすいであろう。



## 9. 動詞述語の構造のレベル

最後に、日本語では、「前要素の動詞+後要素の接尾語」の構造はどのレベルに位置づけられるか検討する。語構造・句構造かのどちらのレベルに入れられるだろうか。本節では、特に助詞系形態の侵入・解除・置換えを認めるかどうかに基づいて少なくとも三つのレベルに分ける。一つ目のレベルは助詞系形態の侵入を認めないものである。yonda, yonde, yomeba, yomanai, yomeru, yomimasu等は、前要素 yon (yom)と後要素 -ta (-da), -de (-te), -ba, -nai, -eru, -masuとの関係が強固で、例えば助詞系形態「は」の侵入等を認めない<sup>14</sup>。これらは語構造のレベルに入れるのが分りやすい。二つ目のレベルは助詞系形態の侵入・解除・置換えまたはその一部分の解除を認めるものである。この構造では、後要素は自立度が高い部分があつて句構造に入れた方がいいであろう。このグループに入れる構造は例えば yomu では次のようである。

(10) yomukotogadekiru → yomukoto(ga>mo)dekiru

(11) yondeiru → yonde(Ø>wa)iru

(12) yondemoii → yonde(mo>Ø)ii

(13) yondewaikenai → yonde(wa>Ø)ikenai

(14) yomanakutemoii → yomanakute(mo>Ø)ii

(15) yomutokoroda → yomutokoro(da>Ø)

(16) yomuhazuda → yomuhazu(da>Ø)

(17) yondekudasai → yonde(kudasai>Ø)

(18) yomanakerebanaranai → yomanakereba(naranai>∅)

(19) yomukamoshirenai → yomukamo(shirenai>∅)

この場合、(10)～(19)の後要素 *dekiru*, *iru*, *ii*, *ikenai*, *tokoroda*, *hazuda*, *kudasai*, *naranai*, *shirenai* は自立度が高く、前要素との間に助詞を入れたり、置換えしたり、その部分を消したりすることができる。後要素は自立度が高いことによって、句構造に入れやすい。

三つ目のレベルは一つ目と二つ目のレベルの間のものである。他の要素の侵入・解除・置換え等を認めない、つまり語構造に入れることもできるし、構造的には句構造に入れることもできる。例えば *-masenka* は *masen*(否定)+*ka*(疑問)からなっていて、それぞれ意味を持っているが、合わさって勧誘という意味になる。この中間レベルに入る要素は *yomimasenka* の *-masenka* と *yomimashooka* の *-mashooka* 等である。

この三つの区別はより議論する必要があるが、本稿では動詞述語を一番広い構造、つまり句構造としていちづける。日本語では、動詞(＋連結要素)＋後要素により、述語句構造が構成されるのである。

## 10. 結論と今後の課題

以上の記述により、子音動詞 *u* について構文的、形態的、意味的、言語類型論的、日本語教育的な観点から観察して述語動詞部の連結要素を提案した。結論としては、子音動詞の最後の *u* は終止要素と連結要素の二つの機能・役割を持っている。終止要素として、*-u* は文を終結させる機能を持っている。この場合、*-u* は非過去の意味があり、具体的レベルに位置づける。連結要素として、*-u* は意味がなく動詞語根と広い意味の接尾語 *-tai*, *-ta*, *-nakerebanaranai* 等との間にある接着剤というべき連結要素として扱う。この場合、*-u* は抽象的レベルに位置づける。抽象的な接着剤としての *-u* は具体的には後続形態によって、そのまま *-u* の時も、*-i-*, *-a-*, *-e-*, *-∅-* に変わる時もある。この *u*, *i*, *a*, *e*, *∅* は異形態とも言える。

本稿では、連結要素を子音動詞を中心に観察した。より語形変化(活用)の単純な母音動詞の *ru* においても、基本的に同様の考え方で、具体的レベルで非過去の後要素、抽象的レベルで連結要素として働くと考えられる。詳しい考察は別の機会にのべたい。また、形容詞・形容動詞などの述語要素や後要素同士の接続においてはどのような連結要素により、どのような連結方法があるのかは今後の研究課題となる。

## 注

<sup>1</sup> 後要素に自立度が高い部分がある場合、後要素全体の構造は一体化・文法化しているとは言いにくいかもしれない。例えば、*yomukotogadekiru* は *yomu+koto+ga+dekiru* であり、それぞれ自立した形態として扱われる。しかし、本稿では *yom-u+kotogadekiru* で、後要素 *kotogadekiru* は一つの要素として扱う。つまり、後要素 *kotogadekiru* は一体化・文法化した一形式として、前要素 *yomu* の語根 *yom* に接続する。これを連結するのが *yomu* の *u* である。

一体化・文法化というのは、いくつかの自立要素がその自立性が低くなって他の要素と連続して一つの文法カテゴリーになることである。秋元実治(2002:4)は「文法化は一般に言って、開かれた語彙項目が閉じられたクラスの文法的要素に変化する過程を言う。その際、統語上の独立性や語彙的意味の消失、さらには、音声的摩擦なども通常伴う」と説明した。この前提で例えば、開かれた語彙 *iru* が *teiru* という構造において、*iru* の語彙的意味が失われ、*te* とともに一体化して、進行の意味を表す形式となっている。

9節では、後要素 *ta* (*da*), *de* (*te*), *ba*, *nai*, *eru*, *masu* は動詞の語根と接続して一つ目のレベルの

語構造に位置づけた。これらはもちろん一つの要素として扱う。さらに後要素がいくつかの要素からなる kotogadekiru, tokoroda, masenka, mashooka, temoii, teiru, tekudasai, tewaikenai, nakerebanaranai, nakutemoii, kamoshirenai, hazuda は 9 節では、二つ目・三つ目のレベルで句構造として扱ったが、本稿ではこれらは文法化して一つの要素として考えていく。

<sup>2</sup> 交換というより、ta(i)と na(i)は、動詞語根 tabe と ru の間に侵入するとも考えられるが、本稿では一定の文法的意味を示す形態として tai, nai を一形態と見るため侵入とは考えない。

<sup>3</sup> この場合 te/ta という後要素は、別の後要素の一部として構成するものがある。例えば tewaikenai, temoii, tahoogaii, tara などがこのケースに入る。

<sup>4</sup> この現象に関して、歴史的に、金田一京助 (1932:111) は、前者が「i の脱落は所謂促音便というものを生じた」と、後者が「i の脱落に伴って、同化の現象を生じた」と説明した。

<sup>5</sup> この現象に関して、歴史的に、金田一京助 (1932:111) は撥音便と呼ぶ。その過程について、母音 i の脱落と同時に連濁を生じていると述べた。

<sup>6</sup> 歴史的に、金田一京助 (1932:99) と坪井美樹 (2007:59-60) は母音 i の前に脱落する子音 k と g の現象があると説明した。

<sup>7</sup> しかし、後要素としては reru/rareru と seru/saseru とする。この場合、reru/rareru と seru/saseru の ru も連結要素として扱うことができるが、本稿では対象としない。

<sup>8</sup> Verhaar (1999:214) を参照。

<sup>9</sup> Verhaar (1999:318-327) を参照。「連結段階性」という術語はインドネシア語の「Hierarki Penyambungan」という術語の訳語である。

<sup>10</sup> 分詞形容詞という術語は、インドネシア語の partisipia の意味を翻訳するのに使用する。Partisipia は基本的には、形容詞のように扱う動詞を指示する (Harimurti Kridalaksana, 1993:156)。

<sup>11</sup> 古代日本語では、6「この」と 5「どの」の「の」は連結要素になると考えられるかもしれないが、現代語では「こ」「そ」「あ」「ど」は形態素でなく、本稿では、この二つの語は、「この」「どの」のように、一つの語だと考える。

<sup>12</sup> 山田敏弘 (2006:14) を参照すると、活用表にはナイ、ウ・ヨウ、レル・ラレルに接続できる動詞語幹は未然形に入れる。

古代語では、意志を表わす要素は「む」であるが、例えば「飲む」は「のまむ」に、「食べる」は「たべむ」になる。学校文法では、語幹「のま」「たべ」は未然形にあたる。一方、現代語では、例えば、nom- $\emptyset$ -oo と tabe- $\emptyset$ -yoo のように oo と yoo という要素に示されている。現代語での語幹 nom-, tabe- は形態的には他と区別できないが、古代語の考え方に従って、未然形としている。

同じように、古代語で可能を表わす「る」は、例えば「飲む」は「のまる」になり、「食べる」は「たべらる」になる。学校文法では、語幹「のま」と「たべ」は未然形である。一方、現代語ではそれぞれ nom- $\emptyset$ -eru と tabe- $\emptyset$ -rareru になる。現代語での語幹 nom-, tabe- は形態的には他と区別できないが、古代語の考え方にしたがって、未然形としている。

<sup>13</sup> 日本語教育の活用表は山田敏弘 (2006:25) を参照する。

<sup>14</sup> yomimasu (読みます) に対して、yomiwashimasu (読みはします) がある。この場合、yomi は名詞化して、「する」という動詞を加えると解説できる。全体の構造は「する動詞」になると考えられるが、より検討する必要がある。

## 参考文献

秋元実治 2002 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房

金田一京助 1932 『国語音韻論』 刀江書院

スリーエーネットワーク 2002 『みんなの日本語初級 I』

スリーエーネットワーク 2002 『みんなの日本語初級 II』

城田俊 1998 『日本語形態論』 ひつじ書房

坪井美樹 2007 『日本語活用体系の変遷』 笠間書院

山田敏弘 2006 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版

AOTS 2005 『新日本語の中級』 スリーエーネットワーク

Harimurti, Kridalaksana. 1993. *Kamus Linguistik*. Jakarta: Penerbit PT Gramedia Pustaka Utama

Roni. 2008. 『日本語における qualifier、一動詞述語を中心に』 名古屋大学大学院修士学位論文 (非出版)

Sudaryanto. 1983. *Predikat-objek dalam Bahasa Indonesia, Keselarasan Pola-urutan*. Penerbit

Djambatan

Verhaar, JWM. 1996. *Asas-asas Linguistik Umum*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press

(口ニ/日本語学)